

**オーストラリアにおける
日本語教育について
～異文化間教育の実態～**

人文学部 英語英米文化学科 4年
田中 和花

研修先国名：オーストラリア

研修期間：2016年8月15日～9月11日（28日間）

1. 動機

在学中、オーストラリアのディーキン大学の生徒との交流を通じて、日本語を専攻していないのにも関わらず日本に対しての興味が強い学生が多いことに気付いた。彼らに理由を聞いたところ、日本以上に“異文化”に触れる機会が多く、実際若者たちの間では日本のアニメや漫画を通して、異文化に触れていると話してくれた。そこから「外国における日本への理解は一体どうなっているのか。」「外国ではどういう風に異文化を理解させているのか。」といった疑問が生まれ、この題材をもとに卒業論文を書くことを決め、今回の海外研修に挑戦した。なお、筆者自身と以前から交流する機会も多く、多文化・他民族国家でもあるオーストラリアで調査を行うことに決めた。

そのうえ大学3年次に、日本における英語教育について学ぶ機会があり、元々言語教育には興味があつた。よってオーストラリアにおける異文化間教育の中でも日本文化の核心とも言える「日本語教育」に注目して、調査を行うことにした。

2. 先行研究

I. 異文化間教育とは

まず異文化間教育についてだが、「2つ以上の相異なる文化の狭間で展開する教育または人間形成の過程・活動」（佐藤 2010 : 18）と定義されている。また日本のみならず、世界全体が多文化社会に変わっていく今日において、「文化をまたがって展開する人間形成のプロセスをたどるためには、これまでとは異なる教育の枠組みが必要である。」（佐藤 2010 : 18）と、改めて異文化間教育の必要性を述べている。

しかし佐藤は今日の異文化間教育の課題について次のように述べている。

「(外国人の子どもを対象にした異文化間教育の研究において) 社会学、心理学などの学問分野でも、多くの研究成果が蓄積するようになっていった。こうした外国人の子どもの研究の広がり、特定の専門分野においても、異文化間教育という領域が認知されるようになり、異文化間教育学は研究対象を独占できなくなり、いわば『普及・拡散』という状況におかれることになったのである。」(佐藤 2010 : 23)

つまり、異文化間教育が他の学問により研究が重ねられた結果、その領域内での学問としても取り上げられることが多くなり、異文化間教育学は固有の学問として認識されなくなっていったのである。

しかしこの課題を否定的にとらえるのではなく「既存の学問の成果を踏まえつつも、それだけではとらえきれない『例外や異端を含めて総体としての現実』を把握すること。」(佐藤 2010 : 28) と新たな解決策も述べている。例えば、言語習得能力が遅れている生徒や、何らかの理由により教育が受けられない生徒がいた場合にも、きちんと彼らを受け入れ、理解することが必要である。

今後、異文化間教育の考え方が広がり、特定することが難しくなるにしろ、実際展開されている授業全体を受け入れることが、新しい異文化間教育学を再構築することに求められており、そういった柔軟性が自ずと必要になると筆者は考える。

II. 日本語教育

異文化教育学会のホームページによると、現在では心理学、社会学、文化人類学、言語学、国際関係論といった分野から研究が行われている。前章でも述べた通り、今回の海外研修では日本文化の核心ともいえる「日本語教育」について主に調査を行った。

下記の資料は、国際交流基金が発表した、海外における日本語学習者数である。

図1：海外での日本語学習者数

	国・地域名	学数者数(千人)	増減率(%)
1	中国	1046	26.5
2	インドネシア	872	21.8
3	韓国	840	▲12.8
4	オーストラリア	296	7.6
5	台湾	232	▲5.9

国際交流基金ホームページより引用『2012年度 日本語教育機関調査 結果概要』一部抜粋

<https://www.jpjf.go.jp/j/about/press/dl/0927.pdf>

上記の資料の増減率は 2009 年度の数値に対しての数値であり、上位 2 か国そしてオーストラリアにおける日本語学習者が増えていることが分かる。韓国・台湾では教育制度の変更が数字に影響を及ぼしたと考えられるが、それでも世界における日本語学習者数は年々、増加している。

III. 日本語教師

その中でも日本語を教える側、日本語教

師について、太田は次のように述べている。

学校現場の日本語教師は、学校内外の経験を通して学んでいくと同時に、教室において刻々と変化する状況を意味づけ、意思決定をし、行動する、日常的な実践の中で学んでいく。このような主体的な学びを通して、日本語教師は日本語を教える意味と実践の在り方についての個性的な意味世界を形成していくのである。(太田 2009 : 198)

つまり日本語教師も自身が展開していく授業を通して、どんな状況に直面したとしても、主体的に考え行動することが求められる。ここでの意味世界とは教師の多面的な考え方であり、意味社会を形成する過程・形成された中身を持つことの大切さをここでは主張している。

以上の先行研究の中から、問題意識として挙げられるのは、

- ・異文化間教育の「普及・拡散」に対し、新たな教育策を生み出しているのか。
- ・日本語教師は実際に主体的に、固有の意味世界（ここでいう個性的なクラス）を展開しているのか。

これらの問題意識を問う過程において、オーストラリアにおける日本語教育の実態を明らかにしていくつもりである。

3. 調査概要

日本語教育の中の日本語教師を調査するうえで、「日本語教師が実際学びの過程と学びの中身におけるライフヒストリー法の積極的な展開は、異文化間教育学における今後の可能性を照らし出すものとして注目に

値する。」(野入 2016:79) と述べられている。ライフストーリー法とは「直接、私たちが調査対象者に会い、インタビューなどの言語的な相互行為をとおして語り手の生活世界を聞きとり、それをもとに社会の分析や解釈、さらに公表まで行うもの」(桜井 2007:90)である。

すなわち、日本語学習者あるいは日本語教師に直接話を聞き、経験談や語り手自身の考えの中から、日本語教育の在り方を模索する調査方法が存在するのだ。

そこで筆者は、オーストラリア・メルボルンに在る日本語学校の教師の方から話を聞き、その中から日本語教育の在り方、そして今後の展望について調査をすることにした。

調査方法は非構造化のインタビュー用紙を使い、質的調査として代表的な対話式インタビューを行った。

調査を行った学校はオーストラリアの公立学校ではなく、日本語の語学学校にて調査を行った。オーストラリアの中でも第2の都市・メルボルンは日本語学習者が多く、ここ10年間で日本語の語学学校が増えてきた。今回、調査に協力してくれた学校は以下の二校である。

1. JIC Language School



市内の Parliament 駅に近い JIC Language school。日本語だけではなく中国

語の授業もあるようで、年々生徒数は増えているようだ。

2. Japaneasy



市内の Russell 通りに面している Japaneasy。入口にはこのようにたくさんの習字の作品が飾られており、日本の文化を大切にしているのが分かる。

4. インタビュー

① 今村氏 (JIC language school)

1人目のインタビュー相手(話者)は、メルボルンの市内にある「JIC language school」で勤務されている今村氏。インタビューは2016年9月7日11時30分から約45分間、語学学校内で行った。インタビュー相手の詳細、プロフィールは下記の通りである。

- ◆ 性別：女性(30代前半)
- ◆ 出身地：兵庫県
- ◆ 学歴、これまでの経験：

- 大学（日本語学科）卒業後、日本で就職。
- 3年後、オーストラリアへ渡る。最初はインターンシップとして日本語の非常勤講師として働く。
- ワーキングホリデービザを使い、2年間メルボルン JIC 語学学校の先生として勤める。
- その後、3年間台湾で働く。
- 今年の1月から JIC 語学学校へ戻り、現在は Head Teacher として働いている。

- ◆ 外国生活歴：オーストラリア、台湾に合計6年間暮らしている。
- ◆ 日本語教師歴：今年で6年目
- ◆ 家族背景：両親が海外旅行、欧米文化に興味があるらしいが、外国には暮らしたことはない。高校生の頃、メルボルンへの短期の語学学校も母親の薦めで参加した。

Q は筆者の質問内容で、A はそれに対する今村氏の語りである。〈 〉は筆者による補足および考察である。

Q 日本語教師に興味を持ったきっかけはなにか。

A まさに「メルボルン」である。高校生のとき、母親の薦めでメルボルンの2週間の短期留学に参加した。そのとき通っていた公立高校はとても日本語教育が盛んであり、よく生徒たちに日本語で話しかけられた。しかし、自分が思っていた以上に日本語を教えられない、答えられないことが多く「わたしは日本人だけど、日本語のことをよく知らないんだ。」と気づき、それ以来日本語に興味を持ち始めた。

【やりがい、楽しい点について】

Q 6年間日本語教師をしているうえでどういったことにやりがいを感じているか。

A まず第一に、外国の人とコミュニケーションをとること。会話を通じてお互いの価値観や異なる考え方を知ることができ、自分の視野が広がることに楽しさを感じる。

二つめは言語比較の楽しさを感じられること。自分は中国語も多少できるので日本語・英語・中国語の文法や語彙を比較することに楽しさを感じている。

言語比較と関連して、外国人の生徒が自分に新しい視点で日本語を教えてくれる。例えば以前、生徒から「冷える」と「冷める」の違いについて問われた。自分では無意識のうちに使い分けていた日本語をいざ説明しようとする、一瞬どう説明していいのか考えてしまった。その瞬間、ネイティブの日本語話者として一方方向からしかみていなかった日本語を改めて見直すことができた。

Q 生徒の疑問に対して、すべて答えているのか。

A そうではない。ときには分からないからと次回に答えたり、ときには分からないから一緒に考えたりもする。必ずしもその場で答えなければならないという風には考えていない。

〈実際、日本語教師は教壇（現場）に立つと自分が予想していなかった質問を受けることが多いらしく、今村氏のこの体験もその中の一つだと考えられる。しかし受けた質問を必ず答えるというがちがちな考えを彼女は持たず、教師としてその場に合わせ

た柔軟な対応をしているのが分かった。>

【苦勞した、工夫した点について】

Q 生徒の質問も含め、これまでの教師生活で苦勞した点はあったか。

A やはり新米だった頃はとても苦勞した。日本語の文法をたくさん覚え、それを外国人生徒に効率的に教えなければいけないときは一番苦勞した。しかし教えていくうちに、教え方は一つではないことに気づき、色々なクラスに対応していくためには一人ひとりの生徒を把握していくことが必要だと感じた。

Q 生徒を把握していくために、どのような工夫をしているか。

A たとえば、生徒一人ひとりの好きなもの・興味あるものを把握してその人だけのキャラクターを作る。そうするとその人の特徴を掴み易く、授業を始める際も「(ビール好きな人に向かい) ○○さん、昨夜ビール飲みましたか？」と、本授業を始める準備段階にもなれる。そのような方法で学生にアプローチをしている。

<質問への答え、生徒一人ひとりの把握の仕方も今村氏自身の考え方、そしてそれらを柔軟に実行していることが分かり、前に述べた日本語教師が実際に主体的になり固有の意味世界を持った授業を展開しているのが分かった。日本語教師のなかには、生徒に触れ合う余裕が無かったり、変化に対応できない教師もいるが今村氏が上記のような行動ができるのは教師の経験歴も関係すると筆者は感じる。最後に今村氏は言語教育について次のように答えてくれた。>

【文化と言語教育】

“文化”と“言語”の違いが日本語学習に大きな影響を与えている。私がかつて教えていた台湾では漢字圏（日本の漢字に似ている繁体字を使用）だったから、生徒の日本語理解度は高かった。また日本が台湾を統治していたこともあり、彼らは日本の文化を昔から普通に、自然に理解している。

「どうぞよろしくお願いします。」という同じ表現が中国語にはそのままある。台湾の生徒にとっては、この表現をすぐに吸収できるが、欧米系のオーストラリアの生徒は違う。「どうぞよろしくお願いします」が一体何なのか、どういった表現の仕方なのか、どういったときに使うのかを一から説明していかなくてはならない。また理解はしてもその表現を使うとは限らない。そういった意味でも、文化や習慣は言語学習に深く結びついていると思う。

<日本語教育に焦点を絞っていた筆者にとって文化が言語学習に密に関わっているという話は意外であり、とても驚いた。しかし3年もの間、台湾にて教師を続けた今村氏にとっては文化の影響は強いと感じており、彼女が学生時代に学んだ日本文化の知識が日々生かされていると感じられる。

また教育の学問とは別に、文化や習慣といった文化学の視点から日本語教育を彼女は述べており、既存の教育学の枠組みの外から新たな考え方を物語っていた。>

② 小川氏 (Japaneasy)

2 人目のインタビュー相手（話者）は、メルボルン市内の語学学校「Japaneasy」で勤務されている小川氏。インタビュー日

時は 2016 年 8 月 25 日 14 時 30 分から 1 時間、9 月 5 日 17 時 40 分から約 20 分間、計 2 回、語学学校内で行った。インタビュー相手の詳細、プロフィールは下記の通りである。

- ◆ 性別：女性（40 代後半）
- ◆ 出身地：兵庫県神戸市
- ◆ 学歴、これまでの経験：
 - 神戸の大学（文学部国文学科）を卒業後、一般企業に就職。
 - 阪神淡路大震災を体験、明日は来ると当たり前になっていたが、それは間違いだったことに気付く。
 - 28 歳の頃、ニュージーランドでワーキングホリデーを行い、その経験がきっかけで日本語教師に興味を持つ。
 - 日本語教師養成を受けた後、2000 年に大阪で日本語教師として働く。
 - 書道の筆耕として 3 年間半勤めた。（日本語教師以外の仕事）
 - 「誰かを幸せにしてあげたい」という思いのもと、日本語教師を再び始める。
 - 韓国で 3 年間半教えた後、2011 年にメルボルンへ渡る。
 - 現在の Japaneasy でアルバイトとして勤めたと同時に、モナッシュ大学院で応用言語学を学び、修士を取得。
 - 2013 年から現在の Japaneasy で正社員として勤めている。
 - ◆ 外国生活歴：ニュージーランド、オーストラリア、韓国に合計 12 年間半暮らしている。
 - ◆ 日本語教師歴：今年で約 10 年目
 - ◆ 家族背景：元々、外国に興味を持っている家庭では無かった。海外へ行くのも親に反対されていた。

Q は筆者の質問内容で、A はそれに対する今村氏の語りである。〈 〉は筆者による補足および考察である。

Q どのような経緯で日本語教師になろうとしたのか。

A 大学卒業後、一般企業に就職した。しかし 1995 年に阪神淡路大震災を体験し、これまでの考え方が一変した。「当たり前のように明日は来ると考えていたが、そうとは限らない。将来を見通して、今やれることはなにか。」と自問し、28 歳の頃に海外へ出た。その当時、暮らしていたフラットで日本語を勉強している学生に出会い、文法や発音を質問されるようになった。しかし全ての質問に答えられず、自分が思っている以上に難しい仕事だと感じたのが、最初のきっかけである。その後日本へ戻り、日本語養成講座に通い、資格を取得した。

【やりがい、楽しい点について】

Q 三カ国で日本語教師をやってきたが、それぞれどういったやりがいを感じてきたか。

A まず日本で教師を行ってきたときは、留学生に大学進学のための一科目として日本語を教えていた。大学進学というひとつの人生の節目をサポートする立場上、合格させてあげたときはとても嬉しかった。

韓国でも同様、受験に合格させるために日本語を教えていたが、韓国は超学歴社会であるため、先生としてのプレッシャーが大きかった。生徒の親の中には「先生、この子を合格させるために宿題多く出してください！」と直々にお願ひする親もいて、それほど大学受験というのは人生に大きいものだと感じた。

生徒に日本語を教え、大学に合格させてあげることがなによりのやりがいだと感じたが、彼らは日本語を学習していくうえで孤独を抱えていた。日本の留学生は故郷を恋しく思う気持ち、韓国の学生は人生がかかっている勝負に押しつぶされる気持ち、それぞれ心の中で孤独を味わっていたと思う。そういった部分を和らげるのもやりがいの一つだった。

今現在、Japaneasy で働いているが、生徒の「分かった!」「できた!」と喜ぶ顔を見るのが一番嬉しい。また日本語養成講座も開いているので、将来日本語教師になる人へ新しい人生を歩んでほしいと願っている。

Q 日本語教師を 10 年間勤めているが、この仕事をどのようなものと考えているか。

A 楽しいことしかない。それは自分自身が先生として教えている楽しさだけでなく、生徒とのコミュニケーションを通じて楽しさを感じている。

現在、Japaneasy には様々な国の出身、また職業の人が集まっているのでたくさんの情報を得ることができる。そういった中から日々、自分の見聞が広がるのと同時に、自分は「教える」ことより「学ぶ」ことのほうが多いと感じている。

<教師という職業にも関わらず、「教える」ことより「学ぶ」ことが多いという言葉に筆者は注目した。なぜなら本来の教育のイメージは、教師が主体となり一方的に生徒に「教える」ことだと考えていたからである。小川氏が考える生徒から「学ぶ」教育について次の質問をしてみた。>

【生徒から「学ぶ」教え方】

Q 日本語の授業を行ううえで、教師同士で授業の展開を話し合うなど、お互い刺激し合っているのか。

A 私は教師同士より、生徒からどう授業を展開していけばいいか学んでいる。なぜなら、生徒一人ひとりによって教え方が異なり、なおかつ生徒からの生の声の方が、より良い授業を作るのに最も効果的だと考えているから。

Q (生徒から学ぶことを通じ) 最初に比べ、自分自身が日本語教師としてどのように変わったか。

A 今と違い、最初に日本で 1 年間教えていた頃は、生徒から受ける質問ほど怖いものではなく、一方的に教えることしか考えられなかった。しかし怯えながら教えている私を見て、生徒側からアドバイスをくれるようになった。例えば「先生、あの文法の授業の教え方、分かりづらかったから次からこういう風に教えてほしいな。」や、「先生、さっきの授業の教案忘れていたでしょ? すごく怖い顔していたからやめたほうがいいよ。」といった声をかけられるようになった。

そうやってサポートしてくれる生徒の存在がとてもありがたく、それ以来生徒から「学ばせてもらっている」と考えるようになった。また生徒のおかげで自分自身が成長していると感じるようになり、生徒のためにも今後より成長していこうと考えるようになった。

<ここまで小川氏の口から「生徒から学ぶ」といった言葉が多く、それほど彼女にとって生徒の存在は大きいと感じられた。また

1 人目の今村氏に比べ、生徒を中心に授業を展開している点から、両者にとって教師と生徒の関係性に若干の違いが生じた。>

【工夫する点について】

Q やりがいと反対に、まだまだ工夫する点はあるか。

A 会話の授業をもう少し良くしたいと考えている。今現在、いくつかの会話の授業を受け持っているが、私と生徒の発話の割合として2：8を基準に進めている。しかし私の知り合いでモナッシュ大学で先生をやっている友人は、1：9の割り合いで生徒に発話をさせている。これからはその友人のように、生徒の発話を増やしていきたい。

Q 生徒の発話を増やすためにどのような工夫をしていくつもりか。

A ポイントは二つ。

まず一つ目は一人ひとりに意見を振ることである。例えば最初にAさんに意見を言ってもらい、そのあとにBさんに意見を述べてもらうとき、私（教師）は具体的な振り方をしなければならない。ただ単純に、（Aさんの意見に対して）

「Bさんはどう思いますか？」ではなく、「Aさんはこういう経験があったけどBさんはこういう経験をしたことがありますか？」のように答えが出やすいようにするのも大切である。

そして二つ目はトピック選びである。普段、私たち日本人も話したいことはたくさん口を動かしてでも話したいと思う。それと同じで、日本語学習者の彼らにも日本語で「話したい！」と思うトピックはあるから、私（教師）が導き出さないといけない。

そのためにも生徒一人ひとりの把握が必要だと思う。日本語学習の主役は生徒、私たち教師はあくまでも彼らをサポートする立場であるのだから、学習者がどれだけ口を動かすのか考えるべきである。

<前の考察と同じ、ここでも生徒を中心に工夫点を述べていた。学習する生徒に対して教師としての自分がどのような立場で授業を展開していくか、ここでも主体的に考え、固有の意味世界を構築していくのが分かった。また彼女の長年の経験談から、現場の様子を柔軟に把握する力も持っており、生徒と教師の適切な距離間も理解していると感じられた

さらに小川氏は大学院時代に、応用言語を専攻している。日本の漫画やアニメに触れている生徒のほうがボキャブラリーの習得が早いと彼女は述べており、彼女はその知識を活かし、日々授業の改善に努めている。>

5. 総括・まとめ

今回、二人の日本語教師のインタビューを通じて、それぞれの経験または教育の考え方が存在していることが明らかになった。

二人が生徒のどういった点を重視し、授業を展開しているか、第2章に述べた問題意識と重ね、両者の相違点は以下の通りである。

今村氏	その国の文化や歴史といった「背景」
小川氏	生徒から教え方を学ぶ「現場」

この結果はあくまでも筆者の見解であり、一概にそうであるとは限らないが、インタ

ビューを通して、両者にはこのような違いを感じられた。

今村氏は彼女自身の知識、またこれまでの経験から文化と言語習得の関連性の強さを主張してきた。台湾と違い、オーストラリアでは日本語文化の習得に難しさを覚えながらも、きちんと一人ひとりに合った教育方法を実践している。

一方、小川氏は生徒から受ける質問、生徒の反応や発話量など、生徒を重視して授業を展開しているのが分かった。一人ひとりの生徒の声、つまり現場から吸収したことを参考に、より良い授業を磨いている。

上記のように、生徒との関係性は異なる部分はあるが、両者とも生徒一人ひとりを把握することの大切さを実感している点は共通している。二人に直接、異文化間教育について聞いていないが、複雑な教育現場の中でも、主体的に固有の教育方法を考え、生徒一人ひとりに合った教えこそ、異文化間教育であると答えるだろう。

6. 終わりに

今回の海外研修では、異文化間教育は筆者が予想していた以上に複雑な学問であり、授業を展開する教師が重要だということを感じた。しかし、インタビューに応じてくれた今村氏、小川氏はとても明るく、やる気に満ち溢れた教師といった印象を受けた。また複雑な学問でありながらも、主体的に考え日本語教師を楽しんでいる様子も感じられ、日本語教師のロールモデルといった存在であった。

2020年の東京オリンピックを機に、今後ますます訪日外国人が増えてくると予想さ

れる。それに伴い、国際交流基金が発表している数より外国での日本語学習者数が増加してくるだろう。

そのような将来の学習者のためにも一人ひとりに合った異文化間教育を展開し、良質な学習を受けてもらいたいのが、筆者の願いである。

参考文献、資料

- 佐藤郡衛 (2010)『異文化間教育 文化間移動と子どもの教育』明石書店
- 佐藤郡衛、横田雅弘、坪井健 (2016)『異文化間教育のフロンティア』明石書店
- 川上郁雄 (2009)『海の向こうの「移動する子どもたち」と日本語教育』明石書店
- 太田裕子 (2009)『日本語教師の意味世界と実践の関係性に関する研究—オーストラリア初等中等教育機関の教師が語るライフストーリー分析をもとに—』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文